

## 会員ひろば

### アンケート「私の好きな漢詩文」

本会会員に、菅茶山の多くの漢詩や著作の中から一番好きな・心に残る漢詩文・語句などをアンケート。さらに、茶山詩以外についても同じ質問をし、会員交流と漢詩文に親しむ機会としたい。

今回は役員各氏の回答(敬称略 50音順)

#### 質問

○ 茶山漢詩の中で、一番好きな漢詩・語句は？

\*その理由・思い出など

○ 茶山詩以外で、一番好きな漢詩・熟語などは？

\*その理由・思い出など

一、寄稿者 上 泰二

○ 七十誕辰 菅茶山 後編巻七―十四

壮志非無才素短 壮志無きに非ざれど才も短く

童心仍有事多愆 童心の有りて 事誤り多し

\* 米寿を来年に控えて、なお、この悔悟。喩え、生まれ変わったとしても、性懲り無く同じ懺悔を繰り返すことだろう。

○ 憂きことの猶この上に積もれかし

限りある身の力尽さむ 熊澤蕃山

\* 「花の命は短くて苦しみことのみぞ多かりき」(林芙美子)。花Ⅱ性別を超えた自分史と読み替えるべきだろうが、近年、わが教員時代と現今の学校教育を対比して、「To be, or not to be. That's the question」思い煩うことしきり。(ハムレット)

二、寄稿者 川崎 行輝

○ 夏日雑詩 菅茶山 後編巻八―九

涼棚待月向溪濱 涼棚月を待ちて溪濱に向かう

恰値前峯上半輪 あなが 恰も値う あ 前峯半輪を上す

\* 菅茶山という神辺の偉人は知っていたが、学生の頃から漢文は苦手で、その作品には興味がなかった。しかし、第1回茶山ポエム絵 画展の開催を承け、そのイメージづくりに取り組んだことを思い出す。

『画山水(梅)』や『蝶(蝶七首)』は何となく分かったが、ある友からの「夏日雑詩を描いてみたい」との思いに誘われ、一緒に大意と対比し、何度も読み返しながら作品を仕上げた。彼が入選したときの嬉しそうな笑顔は、今も忘れられない。

㊦ 水滴石穿 すいてき せきせん

\*軒下から落ちる僅かな水滴でも、同じところに落ち続けると、ついには固い石にも穴をあけてしまうことから、小さな少しずつのことでも継続すれば大きな成果をあげることができるという喩えとして用いられる。

芦田川の源流を辿ったことがある。最初は小さい水が、（大きくなろう）との野望はなくても、下流に向かうにつれて少しずつ少しずつ集まりながら、最後には大河となった瀬戸内海に注ぐ。

最初は難しい・無理だと感じることも、毎日の小さなコツコツと積み重ねる努力の大切さと難しさを乗り越えて頑張り続けることで克服することを座右の銘としてきた。

三、寄稿者 黒瀬 道隆

㊧ 夏日雑詩 菅茶山 後編巻八―八

村婦夜深來慰勞 村婦夜深く来りて勞を慰む

左懐孩乳右盤飧 左に孩乳を懐き右に盤飧

\*茶山詩には農村のありふれた生活に温な眼差しを向け、その場面を詠んだ詩が多い。干ばつで水不足。若い農婦は水番に出た夫のために夜食を持って来た。片腕に乳飲み子を抱き、片手に夜食を携えている。当に茶山の農村詩の真骨頂の作品である。

四、寄稿者 皿海 弘雄

㊨ 「常盤雪行抱弧図」 菅茶山 前編巻八―九

少弟啼飢兄泣凍 小弟は飢えに啼き兄は凍に泣く

誰知他日並英雄 誰か知らん他日並に英雄なるを

\*静御前が雪の中寒さと飢えに泣く幼児を連れてくる絵画から。「この幼児が天下を執る英雄になるとは」と詠んでいる。

漢詩の題材が、絵画に描かれたものを見て詠まれていることに驚いた。

㊩ 偶成 朱熹（しゆき）

少年易老学難学 少年老い易く学成り難し

一寸光陰不可輕 一寸の光陰軽んずべからず

\*高校卒業前の書道の時間、黒板にこの漢詩が書かれており、その日は筆を執ることなく先生の指導のもとクラス全員でこの漢詩を吟じた。初めての詩吟体験だった。

五、寄稿者 小林 貞子

㊪ 所見 菅茶山 前編巻三―四

落日殘紅在 落日 殘紅在り

新秋嫩翠重 新秋 嫩翠重なる

遙雷何處雨 遙雷何れの処の雨ぞ

雲没兩三峰 雲は没す兩三峰

\*山に沈む夕日を見ながら国道を運転していた時、丁度御領のあたりであったか、どこからか「ギンギン ギラギラ」と夕日の曲が流れてきた。この詩の風景の様に思えた。

○ 百聞は一見に如かず「漢書」趙充国伝  
自分の目で見ることの大切さ。

\*菅茶山詩は何回聞いても、なかなか頭に入らないけれど、茶山学習会で勉強したら、その意味がよく理解できるようになった。

六、寄稿者 嶋田 時市

○ 冬夜読書 菅茶山 後編卷三―十五

雪擁山堂樹影深 雪は山堂を擁し 樹影深し

檐鈴不動夜沉沉 檐鈴動かず 夜沈沈

閑収亂帙思疑義 閑かに乱帙を収めて、疑義を思えば

一穗青燈萬古心 一穗の青灯 万古の心

\*身近に廉塾があり雪の降っている情景を思い浮かべることが出来る漢詩で好きです。

○ 宝船 藤野君山

寿海波平紅旭鮮 寿海波平らかにして、紅旭鮮やかなり

遙看宝字錦帆懸 遙かに看る宝字錦帆の懸るを

同乗七福皆含笑 同乗の七福 皆笑を含む

知是金銀珠玉船 知る是金銀 珠玉の船

\*この漢詩は、祝いの席に出席した時によく朗詠しました、身近に感じられる漢詩で好きです。

七、寄稿者 武田 恂治

○ 冬夜読書 菅茶山 後編卷三―十五

閑収亂帙思疑義 閑かに乱帙を収めて、疑義を思えば

一穗青燈萬古心 一穗の青灯 万古の心

\*この漢詩は10.年ほど前から詩吟を始めて一番多く、人の前で詠った詩です。

二百六十年祭・錦城流の初吟会等で詠い、茶山の詩の中では一番好きなものです。

○ 山行 杜牧

遠上寒山石径斜 遠く寒山に登れば石径斜めなり

白雲生処有人家 白雲生ずる処人家有り

停車坐愛楓林晚 車を停め坐に愛する楓林の晩

霜葉紅於二月花 霜葉は二月の花(桃花)より紅し

\*現役時代に山登りを良くしました。定年後、友人夫婦と東北を旅行した時十和田湖の傍にある八甲田山へ登りました。十月二十一日だったと思いますが、紅葉が綺麗で素晴らしい赤と黄色のコントラストでした。ケーブルで八合目まで登ると、そこは雪景色でした。私は、レンタカーを酸ヶ湯温泉へ回送する為ケーブルで下山した。

八、**匿名希望**

○ 画山水(梅) 菅茶山 前編卷五―二十

溪村三五戸 溪村の三五戸

一向絶風塵 一向 風塵を絶す

自種梅花後 梅花を植えて自より後

春来引外人 春来 外人を引く

\*ずいぶん前のことですが、目に留まったのが古い鉢に植えられた古木に咲いた白梅でした。その花は楚楚として、それでいて輝いて、神々しく見えました。それからは、毎年季節が訪れると花を楽しませてくれました。山間に咲いた梅の情景(大小の違いはあれど)とものに似ていると感じました。

○ 学而第一 「論語」

学而時習之 学びて時にこれを習う

不亦説乎 またよろこばしからずや

「有朋自遠方来」朋(とも)あり遠方より来る

不亦説乎 また楽しからずや

人不知而不愠 人知らずしてうらみず、

不亦君子乎 また君子ならずや

\* 久しぶりに友人達と食事に行った時、床に掛かっていた掛軸に、「」の語が書かれており、私も友人もわからないまま、それでいて親しみを感じました。店の人に読んでいただき、とてもほのぼのとした詩(論語)で暖かくなりました。帰ってから調べたり、時代劇映画の中に出てきたりで、より親しみを感じました。

九、**寄稿者** 藤田 卓三

○ 丁谷餞子成卒賦 菅茶山 遺稿卷四―十四

送者停筇客頻顧 送者は筇(ささぎ)を停め、客は頻りに顧(かえり)みる

梅花香裏夕陽傾 梅花香裏 夕陽傾く

\*神辺公民館前に詩碑あり、特に梅花の頃見たくなる。旅立つ山陽を見送る老いた茶山。夕陽の中、梅の香りが仄かに漂う。茶山と頼山陽との物語を想い今の自分が茶山に重なる。

○ 春夜 蘇軾(そしよく)

春宵一刻值千金 春宵(しゅんしやう) 一刻值千金

花有清香月有陰 花に清香有り 月に陰有り

\*友人と夜遊びしていた若い頃、酔って徘徊する言い訳としてよく口ずさんだ記憶がある。老いた自分は季節の移ろいに「生かされている」ことを感じるが、春宵は特別である。春が待ち遠しい。

十、**寄稿者** 松岡 明美

○ **所見** 菅茶山 前編卷二一四

落日残紅在 落日残紅在り

新秧嫩翠重 新秧嫩翠重なる

遙雷何處雨 遙雷何處の雨

雲没兩三峰 雲は没す兩三峰

夕陽が西の空を染めている。植えたばかりの稲のみどりが夕陽に重なる。

\*美しい田舎の風景が目に浮かんで来る。田植の頃であろうか。子ども時代、農繁期田植え休みがあったことを思い出す。田植を手伝うために学校が休みになり、田圃では大人の列に加わって早苗を植えていた。大人が植えるスピードに附いて行こうと泥んこになりながら頑張っていたことが懐かしい。美しく懐かしい情景が浮かんで来る詩文である。

○ **出師表（上奏文）** 諸葛孔明

先帝創業未半 先帝創業未だ半ばならずして

而中道崩殂 中道に崩殂せり

今天下三分益州疲弊 今天下三分して益州疲弊す

此誠危急存亡之秋也 此れ誠に危急存亡の秋（時）なり

\*1982年から始まったNHKの「人形劇三国志」を視て三国志のファンになり、本も読みました。特に心を打たれたのが孔明が二代目皇帝劉禪に差し出した「出師表」です。「危機が迫り存続するか亡びるかの時、皇帝として私情に流されることなく、真心をこめて進言する者を大切にして公正で明らかな政道を示してほしい。」という内容の手紙です。自分が皇帝になっても良かったのに、先帝の三顧の礼の恩に報いて劉禪の育成に誠意を尽くす姿に心を打たれました。

十一、**寄稿者** 安原 美津代

○ **宿生田** 菅茶山 前編卷四一七

千載恩讐両不存 千載の恩讐二つながら存せず

風雲長為弔忠魂 風雲長永久に為に忠魂を弔ふ

客窓一夜聴松籟 客窓旅館の窓一夜松籟を聴く

月黒楠公墓畔村 月は黒し 楠公墓畔の村

\*菅茶山四七歳 妻宣と「北上歴」の旅行の途次、生田祠（現神戸市生田区）参詣。楠の巨木、楠公墓碑などを見て、六百年前の源平合戦や楠木正成兄弟の七生報国を誓う忠魂は茶山翁の心を深く打つものがあつたのであろう。

詩吟を習っていた私は、常陸宮臨席の詩吟大会で、この詩を聞いて感銘を受けた。

㊦ 富士山 石川丈山

仙客来遊雲外巔 仙客来り遊ぶ 雲外の巔

神龍栖老洞中淵 神龍栖み老ゆ 洞中の淵

雪如紈素煙如柄 雪は紈素の如く煙は柄の如し

白扇倒懸東海天 白扇倒に懸かる 東海の天

\*詩吟でこの詩を習い、何時か富士山に登りたかった。七〇歳記念に七合目まで登山した。青空に白扇を逆さまに吊るしたように頂上が見えるという表現がよい。想いが茶翁の「黄葉夕陽村舎詩」に重なる。

十二、寄稿者 山下英一

㊦ 御領山大石歌 菅茶山 前編卷一―六

吾嫌世上多猜忌 吾は世上猜忌多きを嫌い

樂子無知屢來過 子の知る無きを楽しみて 屢きたり過ぎる

此日一杯発幽興 此の日一杯 幽興発し

吾且放歌子妄聴 吾且らく放歌す子妄りに聴け

私はこの世間に、他人への妬みが多いのは嫌だ。おまえ(石)がその様な世上に関係ない相手で嬉しく、一杯の酒を飲み心の憂さを晴らしに来た。

\*現代の世相を見通していたような気がします。善い事は独り占め、悪い事は他人のせい。究極は関係ない人まで道連れにする。私は「大自然と会話し自らを律して最後は死を迎える」そんな人生でありたい。

㊦ 画龍点睛 がりようてんせい

\*物事の最も肝心なところ、物事を立派に完成させる為の最後の仕上げ。絵を描くときはプロ・アマに限らず真剣に絵に取り組んでいます。

水従方円器 水は方円の器に従う

\*人も環境や付き合う人物如何で良くも悪くもなるということ。この教えと廉塾の手水鉢を一般の人に知ってもらい、菅茶山と顕彰会を広めたい。